

観音堂と弓ヶ浜

木澤 千

プロローグ

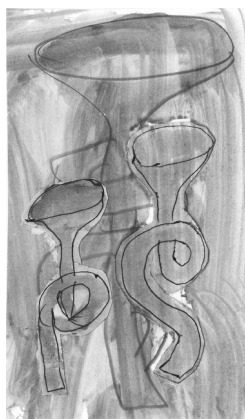
K市は炭鉱を主要産業とする町である。二つの海底炭鉱を中心に内陸部には岡掘りの中小の炭鉱が点在している。戦後復興の掛け声のなか、増産につぐ増産で町は活況に満ちた。炭鉱と関連企業の人口は、最盛時には家族も含めて市の総人口の二割近くを占めた。

しかし、朝鮮戦争を契機に石油需要が急増し、昭和三十年代になると、石炭から石油へのエネルギー転換が急速に進み、戦後の復興を牽引してきた石炭産業に斜陽化の波が押し寄せた。合理化と減産により、市内の炭鉱は次々と閉山に追いやられ、最後まで採炭を続けていた最大手のN炭

鉱も昭和三十八年について閉山を迎える。人口流出と町の急激な衰退で、重苦しい空気が町を覆った。

そんななか、昭和三十七年に創立されたT石油工業の、石油精製と設備新設の申請が許可された。昭和四十年三月のことであった。予定地は、K市の浜郷地区と岬地区の沿岸部であった。新聞は「石炭から石油の町へ」と大々的に報じた。市民待望の朗報であった。

昭和四十一年八月、関係する二市一町の関係者と地元十漁協との事業計画説明会が開催された。席上、会社側からのシーバス（海上送油基地）設置地点の海面調査要請がなされた。これに対して、共同漁業権を持つ漁協側は、航路浚渫とシーバスから工場への海底管敷設による水質汚染と公害の発生に強い危惧を表明した。



翌四十二年四月、二回目の説明会が開かれたが、漁協側の反対姿勢は変わらず、もの別れに終わった。シーバース予定地から製油所に至る海域には、稚魚養殖と広大な海苔の養殖場がある。工場から排出される汚水に加えて海底管から万が一にも油漏れが起ると、養殖海苔や魚介類への影響は避けられず、漁民の生活権が奪われるとの強い不安が渦巻いていた。

六月には漁協側は会社との交渉には応じない、との決定をした。会社側は、漁協との交渉を県と関係市町に委ねざるを得なくなった。十月に漁協に対する新たな斡旋案が示されたが、漁協側は全面的拒否を通告した。そして十二月、県・関係市町の参加で新たな漁業補償会議が設置された。

この間、会社は漁協役員を全国の主要製油所の視察に派遣するなどして、懸念の払拭と理解の促進をはかった。この頃から漁協内部で亀裂が生じ、絶対反対派と補償交渉派との間で駆け引きが始まった。

十二月の補償会議の席上、漁協側は陸上工事の着工を認め、交渉の焦点は補償額と公害防止に移った。金額をめぐる数度目の交渉で会社側は初めて補償額を提示したが、「ケタが違う」と一蹴された。

年が明けた昭和四十三年一月、再度金額が提示されたが、漁協側は、漁場の将来性と油害についてなお不安があると

して再検討を要請した。そして八月に最終案が提示された。県の公害防止条例に油流出規制を加え、実害が出た場合の調停委員会の設置等が付帯された。K市では「T石油建設促進市民大会」が開かれ、会社側と漁協側双方に誠意ある譲歩を求める決議があげられた。

昭和四十四年四月、足かけ三年にわたる漁業補償交渉が妥結に到り解決をみた。

一方、製油所建設用地の確保は、弓ヶ浜を干拓用地として所有するF市の大手化学工業会社が先行して埋め立て工事を行い、昭和四十二年八月に土地売買契約が成立した。また、N炭鉱閉山後、岬地区の跡地を管理する産炭地振興事業団との契約もスムーズに行われ、用地の約八割は確保された。しかし残り二割の民有地の買収は難航した。地主側は、「斜陽化した市の再発展に役立つとは思いますが、先祖代々の土地を離れる者へ、もっと配慮があっても良いのではないか」と反発した。浜郷の弁天山周辺と岬周辺では、用地の範囲をめぐる内部のもめ事もあったが、ようやく円満解決に到った。

昭和四十四年十月に陸上部の建設がほぼ完成した。漁協との漁業補償交渉の解決を受けて、一連の海上設備、シーバースほか製品出荷栈橋も着工した。すべての工事が完了したのは昭和四十五年の七月であった。

昭和四十三年には、工場周辺の付随工事も急ピッチで進められた。工場敷地に沿って陸路でのタンクローリー輸送のために、県道から新たに片側二車線の産業道路が引きこまれ、市民の通行の便宜もはかられた。その道路に沿うように住宅地との間に緩衝緑地帯（緑地公園）も設けられ、市民のランニングや散歩コースとして開放された。緑地公園の西端には市民が利用する三面のテニスコートも造られた。弁天山頂上の観音堂は市内の竜神山中腹に移転され、海を見おろす高台に新しい社が建てられた。観音堂の跡地には稲荷神社が分祀され、工場を一望している。

アサリやハマグリなど貝類の豊富な漁場であった弓ヶ浜の干拓造成地には十数基の貯槽タンクが並び、精製時に発生するガスの燃焼塔からは夜昼なくオレンジ色の炎が上がった。

一、観音堂の孝江

もうこの場所でおもてなしをすることもなくなる……。

朝、孝江は玄関横の縁側に座って弁天山を見上げた。家の前の参道と、その先に続く三十段ほどの石の階段を目で追い、登り切った高台に鎮座する観音堂に手をかざした。

参道の坂道と石段の両側にあった美しい松並木は移植の

ために運び出され、ポツンと社だけが朝の日差しを背後から受けて、黒々と空に浮かんでいる。石段の登り口には工事用の立ち入り禁止のロープが渡されている。

見慣れた美しい景色は殺伐と変わり果て、孝江の心に日々ぼつかりと大きな空洞を広げていた。

観音堂の管理をしている萬寿院の住職がやって来たのは、その翌日であった。

「宮原さん、長い間、お堂の守をしてくれて本当にご苦労やっとな。ほんの劳いの気持ちじゃ」と白い封筒を差し出した。

「とんでもないです。勝手にやってきたことですから、受け取れません」

孝江は身を細くして固辞した。

「ま、そう言わんで……」

住職は縁側に腰を下ろし、白い封筒を孝江の前に置くと観音堂を見上げた。孝江は住職にお茶を煎れてきた。

住職は先代からの申し継ぎで、戦前から月に一度、十九日にお堂を訪れてお経をあげてきた。そのたびにいつもお堂がきれいに掃除され、石段や参道も掃き清められているのを不思議に思っていたが、ある時、門徒の一人から、「宮原の孝江さんのご奉仕じゃ」と聞いた。その後、別の門徒

から孝江の事情を聞いて、戦争がもたらした不幸と苦悩の境遇に深い憐れみを抱き、み仏の慈悲を念じた。

住職はお茶を一口すると孝江の方を向いて、「「ここでお茶をふるまい始めて何年になるかの？」と尋ねた。

「かれこれ二十年になります。最近はお参りにみえる人もめっきり減って……。ちょうど良い頃合いなのかなと……」
「産炭地振興の煽りを食らった形だが、これもご時勢じゃしろう」

「竜神山への移転の日取りは決まったのでしょうか？」
「あつちのお堂の新築がいつ始まるかによるが、移転のための解体工事で少々騒がしうなるかも知れん。ま、我慢してくれ」

孝江の寂しそうな様子に、住職が訊ねた。

「ところで、この先どうするつもりじゃ？」

「先のことはまだ。帰る実家はもうありませんし……」

「そうか。困ったことがあれば何でも相談してくれ」

腰をあげた住職に、孝江は野菜を持たせた。

「これは、これは。ありがたく頂戴します」

丹精込めて耕し野菜を育ててきた畑はやがてなくなる。

一昨日から収穫した最後の野菜だった。

スクーターで走り去る住職の背中を追いながら、孝江は

観音堂を見上げた。

孝江は県西部のY市で板金業を営む家の次女であった。

十六歳の時から近くの紡績工場で働いた。昭和十一年七月、二十六歳になった孝江は、遠縁にあたるK市の宮原家の長男、明雄の元に嫁いだ。畑作農家の嫁として、身を粉にして働いた。宮原家には義父母の要吉とマツ、明雄の三人が暮らしており、明雄とは十歳違いの次男の治は市外の旋盤工場に住み込みで働きに出ている。

結婚して二年目、満州事変後、昭和十二年七月に日華事変が勃発し日中の全面戦争へと戦火は広がった。そして八月、明雄は召集されて大陸に渡った。孝江の度重なる不遇はここから始まる。

明雄の戦死の知らせが届いたのは、送り出してからわずか半年後、昭和十三年二月のことだった。

明雄の葬儀が行われ、要吉とマツとの生活が始まった。

孝江はせめて子どもだけでも授かっていれよと思っただが、それも叶わず、明雄の戦死の悲しみを吹っ切るように畑仕事に精を出した。何度か、実家に帰ろうかと思っただが、働き詰めで年老いて腰も曲がった要吉を見るにつけ、言い出せないでいる。女としてのやるせなさや虚しさを抱え込んで日々をやり過ごした。

半年後、要吉が炎天下での農作業中に脳卒中で倒れ、明雄の後を追うように亡くなった。孝江は戻りたいとの思いを、実家の母親からの「嫁の務め」のひと言に胸の奥にしまい込み、マツとの生活を続けた。

この間、日本は昭和十六年十二月の真珠湾攻撃で太平洋戦争に突入、戦火は広がり続けていた。

昭和十七年二月、明雄の五回忌の法事を終えた日の夜、孝江はマツから思わぬ話を持ちかけられた。

「孝江、どうするえ？」

実家に戻りたい……不実だとは思うものの孝江の本音であった。しかし、マツの独り暮らしを思うと口には出せなかった。

そんな孝江の気持ちを見透かしたようにマツがたたみかけた。

「ここに残って、治と夫婦みよととになってくれんか。宮原の家を絶やすわけにはいかん」

戦死した夫の兄弟と結婚するという話は、何度か耳にすることはあった。治とは七歳も歳が離れている。返事をためらう孝江を押し切るように、マツは一方的に話し、さっそく治に手紙を出した。

「あんたがええと言ってくれば、治に否とは言わせん。ウチにまかせてくれんかの」

孝江は実家の母親に手紙を書いた。返事はすぐに届いた。——このご時世、多くの男は出征しており、後家を娶る男などおるまい。いい話だと思ふ。

週末に治が休みを取って工場から戻ってきた。孝江は治とは親戚の法事の折などに何度か会ったことがある。当時、治は尋常小学校にあがったばかりの子どもで、姉妹のいないせいかわ孝江によく懐いた。居間での顔合わせの時、孝江は成長した治を眩しそうに見つめ、治は上目遣いに孝江にチラと目をやって俯いた。

黙ったまま何も喋らない二人に、マツが間に入る。

「手紙で頼んだ件は考えてくれたか？」

「まだ考えてはおらん。今は戦時特別体制で、戦地に送る武器や弾薬の製造で休む間もない。勤労働員の者たちを指導する男の工具も段々少なくなってきており、手も足りん状態じゃ」

治の慳けん貪どんな返答に、会話はそれで途切れた。孝江は身の置き所もなく、ただ身をすくめて俯くしかなかった。

孝江の様子に、マツは畑を耕して畝を作るように言いつけた。治は承知してくれるだろうか……。不安な気持ちで畑に出かけた。

年も離れており、しかも治は初婚、鋤を握る気持ちも塞せきぎがちになる。

治はその日は泊まって明朝早く工場に出勤することになった。その夜、マツと治の話し合いは続いた。寝間に横になって、隣の居間でボソボソと話す二人の会話を耳をすませた。

——子どもの頃から服やカバンも何でも兄貴のおさがりやった。嫁までもか。

反発する治の低い声が聞こえる。

——言うても明雄とは一年そこらの結婚生活じゃ。子どもも産んでおらんし、見たとおりの器量やし、女として申し分はないと思うがの。

——そういう問題じゃない……。

治は口ぶりのそこかしこに拒絶感を漂わせている。

——そもそも、義姉^{ねえ}さんは承知しているのか？

マツはそれには答えずに、

——あなたは小さい時分に孝江によう可愛がつてもろてたやろ？ まるつきり知らぬ仲でもないし。あなたの返事しだいや。

しばらく沈黙が続き、治がボソツと口にした。

——俺だつていつ赤紙が来るかも知れん。

——だからじゃ。家の跡取りのことがあるし、ことは急いでおる。

治さんは断るに違いない……。孝江はそう思つて目を閉

じた。気持ちのやり場もない思いに、昼間の畑仕事の疲れがどつと押し寄せ、いつしか深く眠り込んだ。

早朝、畑に水やりをしていた孝江の元に治がやって来た。孝江に目を向けることなく言つた。

「義姉さん、本当にええんか？ 本心を聞かせてくれ」
澁々承諾したのが目に見えるような表情で問いかけた。

「治さんさえよければ、わたしは……」

孝江の返事に治は黙り込んで突っ立っていたが、「じゃあ、決めてええんじやの」と言い残して、そのまま工場に戻つた。

年が明けた昭和十八年三月、治は工場を辞めた。

祝言もなく、五月に入籍した。この時、治は二十六歳、

孝江は三十三歳であった。

治との生活が始まって間もないある日の夜、マツは孝江に細長いお守り袋くらいの袋を縫うように言いつけた。言われたままに針を運ぶ孝江に傍からマツが言つた。

「目と鼻の先にあると……明雄との間に子どもが生まれなんだのは、ウチの不信心やったのかも知れん。明日朝一番に子宝さまにお参りに行くからな」

翌朝、畑の畦に植えた花を摘み、手桶に水を汲んで、二人は参道を歩いて弁天山に向かった。

道すがらマツが諭すように孝江に話しかける。

「戦争には必ず勝つ。そのために国は富国強兵の大号令をかけておる。元気な子どもを産むのも銃後の女の務めじゃ」

そう言つてマツは立ち止まつて孝江を見た。

「最後の機会と思つて、せいぜい励んでおくれ」

孝江は黙つて足元に目を落とした。

結婚してそろそろひと月になろうというのに、治とは夫婦の契りは未だにない。孝江が兄嫁だったという気持ちの枷に、治が気怖じしているように思えた。

「おかあさん、実はわたしら……」言いかけて胸が悶^{つか}えた。孝江の表情から事情を察したのか、マツが慰めるように言った。

「まったく、おとんぼはこれじゃから……。ウチからようよう言い聞かせるから。そのうち治もその気になる」

観音堂の扉を開いて狭い堂内に入り、正面の仏像を見上げた。

「右側が弁天さんじゃ。左が子安観音で子宝さんと言うとる」

マツが花を活けている間、孝江は堂内の板張りに雑巾をかけて清めた。それから持参した袋を経壇に奉納した。狭い堂内には沢山の袋が吊るされている。近隣で広く子宝信仰が根付いていることをうかがわせた。

観音堂は浜郷の南にある小高い弁天山の頂上、海岸景勝の地に建っている。お堂の裏は断崖絶壁になつており白い波が打ち寄せている。見下ろす弓ヶ浜は東西一キロにわたる弓形の遠浅の砂浜で、貝類の豊富な漁場である。

観音堂は元々は弁財天を祀つた弁財天社に、浜郷の南地域にあつた廃寺の古跡から発見された子安観音像が合祀されたと言われている。子安観音は子授けの観音として厚く信仰され、別名子宝さんとも呼ばれている。底を閉じた布の袋を納めて祈願すると子どもに恵まれるという言い伝えがある。

手を合わせて拜む孝江に、隣からマツが言った。

「授かるまで毎日、お参りするようちに、分かつたな？」

その夜、治はおずおずと手を伸ばしてきた。翌朝、マツは二人の様子に得心したような目を向けて頷いた。

それから毎日、孝江は早朝にお参りを済ませてから、治とともに畑に出た。

夜の生活は夫婦の情愛を深め合うのとは全く様を異にした、ひたすら子種を宿すためだけのようには孝江には思え、惨めな気持ちで応じていた。

やがて孝江は身籠つた。昭和十八年の盆明けの頃だった。

情がわいたのか意外にも治がことのほか喜んだのが、孝江には嬉しかった。

「おかげじゃのう、ありがたいことじゃ」

マツは何度も口にし、「明日からはお礼と安産のお願いに、お参りを欠かさぬようにな」と言った。

治は畑仕事に一層精を出し、時々は「無理はするな」と声をかけて孝江を気遣った。孝江はようやく人並みな夫婦になれそうな気がした。

観音堂の十月の秋の祭礼が行われ、参詣者の列が日がな一日、家の前の参道を行き来した。孝江も参詣者に混じって、用心しながら石段を登り、安産を願ってお参りをした。家に戻ると、治とマツが神妙な面持ちで待っていた。何が起こったのかはすぐに察しがついた。

この頃、南方戦線での戦況が^{はかばか}捗々しくないと話があり、本土決戦という言葉とともに耳に入ってくるようになっていた。召集令状がいつ来るか、再び夫を戦地に送り出すことになるかも知れないという憂いに、孝江の胸中の不安は広がっていた。

治が黙って召集令状を孝江に差し出した。県西部の陸軍連隊分所に出頭するようにとの触れ書のあと、十一月一日という日付が孝江の目に焼き付いた。あと半月もない。思わず口を手で覆った孝江にマツが強く言った。

「泣いちゃならん」

浜郷からは治と二人の若者が召集されていた。十月三十日、公民館前広場で壮行式が行われた。町会長の挨拶のあと、いよいよ出立の段になって、治が誰かを捜すようにまわりを見まわしていた。孝江の視線の先に、集まった住民たちの目を避けるように、離れた場所で物陰に隠れるようにして治を見ている小柄な男がいた。治は男を見つけると笑みを投げかけ、男は敬礼で応えた。知らない男だった。駅に向かう治をマツと二人で見送った。振り返ると、足が不自由なのか体を左右に振るようにして立ち去る、さっきの男の後ろ姿があった。

治は出征する前の晩、一枚の半紙を孝江に渡した。墨書で「男子勇、女子愛子」と命名してあった。

元氣な子が生まれますように、治さんが無事に戻ってきますように……。孝江は毎日、観音堂に足を運び祈り続けた。命名の半紙は縫った腹帯に挟み込んだ。

治がどこの戦場に派兵されたのかは知らされなかった。治からの便りもない。

半月ほどした頃、在郷軍人会の役員をしている年寄りから消息がもたらされた。治たち浜郷の三人は連合軍の本土上陸を阻止するために、最後の防波堤とも言われていた沖縄戦線に派兵されたのだと、その時知った。

昭和十九年四月、治の無事を祈り、帰還を待ちわびる孝江は突然、二度目の不遇にさらされる。このところお腹の子どもが動いたり軽く蹴ったりする胎動を感じ、母親になる喜びをひしひしと噛みしめていた。マツは「男の子に違いない。勇じゃ、勇じゃ」と喜んだ。しかし一週間ほど前から、その胎動がやんだ。そして一転、破水した。取り出された赤子は臍の緒が首に絡まって紫色に変色していた。男の子であった。

苦しかったろうな、勇……。孝江は涙にくれた。

孝江の母親は、臨月近くにお産の手伝いに来ると、葉書を寄こしていた。孝江は初孫に会わせることができる、その日を待ちわびていたのだが、その矢先の出来事だった。マツの落胆は孝江以上に大きく、気が抜けたように寝込んでしまった。すぐれぬ体調を押しして気丈にマツの介抱に明け暮れる日々が続いた。

追い打ちをかけるようにさらなる不遇が孝江を襲った。実家のある町には製油所があり、隣接して陸軍補給廠もあった。三月以降、数度の空襲があったが、六月十日にはその製油所と補給廠を米軍の爆撃機の大編隊が襲った。製油所近くの孝江の実家は空襲で跡形もないほどの被害を受け、家の裏手の防空壕に避難していた両親と姉が焼け死んだ。妹も勤労動員先の工場で爆撃に遭って亡くなった。帰

る実家も家族も失い、孝江は孤独と悲しみに打ちひしがれた。

年が明けた昭和二十年三月二十六日、米軍が慶良間諸島に上陸し、日本軍の本部のある百里城をめざして進軍した。圧倒的な軍事力の前に日本軍は南部に撤退を余儀なくされていた。この時、孝江もマツも、やがて沖縄の住民をも巻き込んだ凄絶な地上戦が繰り広げられることになるなど、夢にも思っていなかった。

やがて広島に新型爆弾が落とされて街が壊滅したとの報が流れてきた。そして八月十五日、敗戦を迎えた。

治の消息は依然として分からなかった。
ある夜、マツが寝間で突然言った。

「治が夢枕に立った。沖縄じゃ全滅した部隊もあるというし、治はもう生きておらんのかな……」

孝江も同じ予感を抱えていたが、気休めとは分かってもマツを元気づけようと、「大丈夫、治さんはきっと帰って来ますよ」と励ました。

翌日から、マツは寢床の中から同じことを何度も口にするようになった。

「即死やったんじゃろうか、それとも爆弾で大怪我をして苦しんだ挙げ句に死んだんじゃろうか」

夜昼なく繰り返し口走り、やがて次第に食が細り、つい

には何も口にしなくなった。マツは衰弱の一途をたどり、失意と悲嘆のうちに亡くなった。

マツの夢は虫の知らせだったのか、敗戦から半月ほど経った九月一日に治の戦死の知らせが届いた。

度重なる不遇の連続に一人残ってしまった孝江は、家の裏手の畑を前に茫然と立ちつくした。

昭和二十一年、戦後の復興は深刻な食糧危機のなかで始まった。農業は生産資材の不足で収穫は微々たるもので、食糧備蓄は底をついていた。細々と野菜作りを続けていた孝江のもとに、食糧を求める人が訪れるようになった。自らの食い扶持として蓄えていた米やサツマイモなどを、着物や帯などと交換して分けてあげ、それらを質草にして暮しの足しにした。

そんなある日、町内の川上夫人が訪ねてきた。戦時中に国防婦人会の地域の世話役をしていた人で、戦後の婦人の務めを威勢よく町内に触れ回っていた。千人針を集めて回ったり、戦時標語のチラシを電柱に貼ったり、各戸に配ったりしていた。孝江の懐妊を聞きつけると、半紙に「強く育てよ召される子ども」と墨書して、部屋をよく見える場所に貼るようにと届けてきた。今では長男の戦死で意気消沈して暮らしていると、地域の人々の口にのぼっていた。

「治さんはまだ何の連絡もないの?」

「いいえ、姑が亡くなってからしばらくして、戦死の知らせが届きました。川上さんもご長男が戦死されたとか」

「どこかの島でらしいけど、遺骨はまだ……」

孝江は夫人を縁側に招き、お茶をすすめた。お茶請けに白菜の漬物を添えた。

お茶をひと口飲むと、夫人が話し始めた。

「息子の戦死の知らせを受けてから、いろいろ考えたの。わたしたちは騙されていたんじゃないかと」

「……」

「負けるなんて露ほども思っていないなかった。今でも、あなたに熱狂していた自分が不思議なくらい」

この人はどうしてわたしにこんなことを話すのだろうか……。孝江は夫人を見つめた。戦時、町内の人々を勇ましく煽り立てたことで、地域の誰彼に話せないのか、それとも地下の人間でないわたしに気を許しているのか……。孝江はそう思いながら耳を傾けた。

「でも、孝江さんは強いよね。めげずに毎日畑仕事に精を出して……」

よそ目には淡々と畑仕事をしているように見えるのだろうか。しかし、平穏な気持ちで暮らしているわけではない。繰り返す人生の暗闇に落ち込んでしまい、失意のどん底か

ら這い上がるすべを見いだせず、ひたすら畑仕事に没頭することしかできないだけなのだ。

夫人は漬物に箸を伸ばして口に入れると、「おいしいわ」と言い、しばらく何か考えごとをするように目を閉じて続けた。

「息子は靖国神社に祀られたらしいけど、どうも腑に落ちないのよ。どんな供養がなされているのかも分からないし、氏子でもないし……」

夫人はそう言って黙った。まだ何か話したそうな様子に孝江はお茶をつぎ足した。「ありがとう」と言うと、夫人は別の話を始めた。

「この間ね、遺族会のお仲間と四国の霊場巡りのお遍路に行ってきたの、少しでも息子の慰霊と鎮魂になればと思つて……。思いもよらぬほど多くのご同行に驚いたわ。家族を戦争で失つた方がこんなにも沢山おられたのだと知つて……。全部巡つたわけではないけど、またいつか続きをまわろうと思つてるの。孝江さんのお茶とお漬物をお願いして、ふと思ひ出したことがあつて」

そう言つて、また漬物を口に運び、お茶を飲んだ。

「札所までの道々、どこを歩いていても遍路道沿いの家のお接待所があつてね。疲れた足を休ませながら、いただいたお茶が美味しく、お遍路さんを励まし応援して

下さる気持ちにも癒されて……。本当にありがたかつたわ」夫人はひとしきり巡礼の話をして帰つて行つた。

お参りが川上さんの心を支えている……。夫人のこの話は孝江の心に強く残つた。

昭和十三年の明雄の戦死以来、わずか八年の間に、死産した勇も含めて九人もの家族を失つてしまつた。四国の巡礼に行けるものなら自分もお参りをしたいと何度も思つたが、そんな生活の余裕はない。しかし家族の慰霊はもとより、何よりも自らの心の平穏を孝江は切実に求めていた。

戦後まもなくの頃から、観音堂へお参りに来る人をちらほら見かけるようになっていた。

戦争の終息で平和が訪れ、世間には安堵とともに、新しい生活への息吹が満ちていた。荒廃した町の復興とともに、戦地からの復員などもあり、ベビーブームが押し寄せ始めていた。ブームは昭和二十二年から昭和二十四年まで続き、その間に生まれた子どもは、後に団塊の世代と呼ばれるようになる。

月例祭礼の日には多くの人がお参りに足を運ぶ。参詣者の中には、若い夫婦連れや母娘連れに混じつて、身重の女性の姿もあつた。孝江は、子どもを授かりたくて毎日通つたあの頃を思ひ出した。

秋の祭礼日、観音堂に向かう参詣者を見ながら孝江はふと

思った。観音堂のお参りにも慰霊のご利益はあるのかしら……。

翌月の月例祭礼の前日、信者の人に混じって参道の普請をする任職を見かけて、作業が終わるのを待った。

「ご任職様、お聞きしたいことがあります」

「何じやろう」

「弁天さまや子安さまに、戦争で亡くなった家族への慰霊のご利益はあるのでしょうか？」

任職には、孝江の思いつめたような表情に何か特別の事情があり、この人自身が救いを求めているように思われた。

「もちろんじゃない、神仏とはそういうものじゃ。慰霊にとどまらず、それを願う人の心に安寧をもたらすのも神仏のみ心じゃ」

その夜、孝江はある決心をした。

数日が経って、孝江は早朝に観音堂と参道の清掃を始めた。終えると家に戻って縁側に粗末な座卓を出して、「休憩所 観音堂にお参りの方、遠慮なくお立ち寄りください」の貼り紙を下げて参詣者を待った。こうして孝江のお参りとおもてなしが始まった。

観音堂は国鉄の駅からもバス停からも二キロほど離れている。見かければ縁側から手招きして案内した。

ほうじ茶や、時節によっては畑の畦にある柿や枇杷の葉

で茶をこしらえてもてなした。お茶請けに自家製の漬物を添えた。

お参りの途中で立ち寄る人、お参りを終えて立ち寄る人は、ボチボチではあるが途切れることはなかった。

縁側で寛ぐ参詣者と何かを話すわけではない。お茶を用意するとそのまま畑に向かう。お礼を言つて立ち去る後ろ姿を見ながら、孝江は心の中で祈る。

良い子に恵まれますように……。丈夫な赤ちゃんが生まれますように……。

袋のしきたりを知らない若い人も多い。手ぶらだと分かれると、木綿の端切れと裁縫道具を渡して、マツに教わった袋の作り方を教えてあげた。なかには、子どもはもう望まないという人もいる。そんな人には袋の底は縫わないようにと助言する。

おもてなしを始めて半年、孝江の心に少しずつ安らぎが戻ってきた。

無事に生まれたお礼参りを終えて、赤ん坊を連れて孝江のもとを訪れる人も多い。そんな時、孝江は自分のことのように喜び、幸せを噛みしめた。ある時、観音堂でのお参りを終えて石段を下る妊婦が数段滑り落ちたことがあった。たまたま目にした孝江が駆けつけ、助け起こして家まで連れて来て、縁側でお腹をさすつてあげながら救急車を待つ

た。幸い妊婦に障りはなく、その後無事に女の子を出産したと人づてに聞いた。この話に、地域に「子宝さんのおかげ」との評判が広がり、参詣者はさらに増えた。

ある時、早朝の清掃とお参りの後、たまたまお堂の裏手にまわって欄干から見下ろした弓ヶ浜に、一艘の船が出ているのを見かけた。男がひとり、小さな船を操りながら、時々、降りて腰あたりまで海に浸かって、肩にかけたロープを引いて何かの漁をしている。いつしかその船を見つめるのも孝江の日課になった。

こうして、孝江のお参りとおもてなしは続いた。

昭和二十二年の春の彼岸の日、昼過ぎに墓参りを終えて帰る途中、家の近くまで来て、家の前にリヤカーが停まっております、一人の男が立っているのを目にした。

接待所を開かなくては、と急いで戻った。

「今すぐ準備しますから、ちよつとお待ちください」そばを通って家に入ろうとすると男が言った。

「この先の岬に住んどうる中村鉄夫と言います。もっと早くに來なければと思うとったんじやが……」と前置きして、「治に線香を上げさせてくれんかの」と頭を下げた。

鉄夫の背丈は成人にしては格段に低く、右膝が外側にひどく湾曲している。仏間に通した時、体を右側に揺らせて

歩いた。

鉄夫は仏壇に向かって手を合わせ、深々とお辞儀をして涙を啜った。涙が零れていた。

孝江は鉄夫の風貌と歩き方に、どこかで見たような覚えがあった。焼香を済ませて振り向いた鉄夫に尋ねた。

「あのう、中村さんと仰いましたか、主人とはどういうお知り合いだったのでしょうか？ どこかでお見受けしたような気もするのですが……」

仏壇の治の写真に見入っていた鉄夫が向き直って、首に巻いた手ぬぐいで涙を拭った。それから、ポソポソと小さな声で言った。

「僅かですが線香代の足しにしてください」と懐から封筒を取り出して、孝江の前にすべらせた。

「ご丁寧ありがとうございます」受け取って仏壇に供えた。

「治とは同い年で幼馴染みやった……」

「そうでしたか」と答えてハツとして鉄夫を見た。

孝江は壮行式の場合から帰る男の後ろ姿を思い出した。鉄夫は治が出発前に笑みを投げかけた男だったのだ。

「治はいつ戦死したのですか？」

「終戦から半月ほどしてから公報が届きました。八月の十六日だったそうです。沖縄でした」